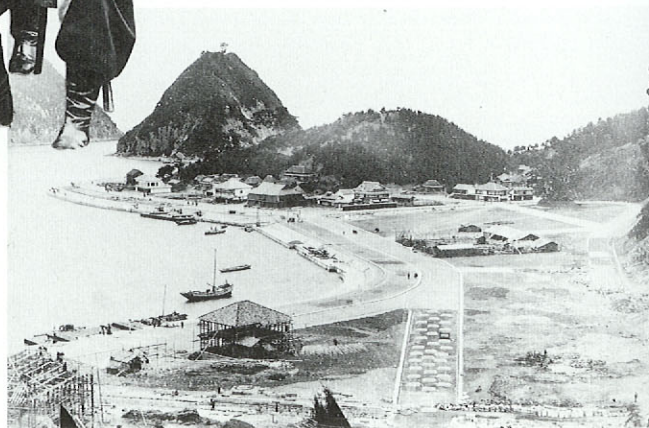




百年は夢の如く、 明治の面影を漂わす 三角西港。



二階ぐしきの縁がわの、杉丸太の柱のあいだから、
海ぞいの、くすんだ色をした美しい町の家並が、ひと
目に見わたされる。碇をおろしたまよまうつらうつら
眠っているような幾そうかの黄いろい帆かけ舟、見上
げるばかりの深緑の断崖が両がわから迫
りよったあいだにひらけている入江
の口そのむこうに、はるかかなたの水
平線まで、いちめんにごらごら光り輝い
ている夏の海。その水と空と相つらなるあた
りに、まながら古い思い出を見るように模糊として打ち霞んでいるあいた
いといた山のすがた。そうしてしかも、くすんだ色のその町並と、黄いろい
幾そうかの帆かけ舟と、深緑の断崖とをのぞいたあとには、なにもかも、天地
はただひとりの紺碧に塗りこめられているのである。



富重利平作品集より

明治時代の貴重な築港技術が残る
日本で唯一の港、「三角西港」は、
今年築港百年を迎えた。
当時、築港の陣頭指揮にあつたのは、
オランダ人技師ムルドルであったとい
う。
(写真左端)